

## 『おらが春』所収句全注解 (七)

黄色 瑞華

## 凡例

- 一 本稿は、『おらが春』所収句（一茶三三二、他三三二）の全注解である。
- 一 一行めに『おらが春』所収句をおく。ただし、使用の漢字はおおむね現行字体とした。また、仮名づかいなどの明らかでない誤りは、右傍に（ ）に入れて注した。
- 一 二行め以下に㊸として、初出及び他書に所収の有無を注した。
- 一 句形等に『おらが春』と異なるものがある場合、▽以下にそれを示した。
- 一 語注は簡略を旨とし、必要最小限にとどめ、特に必要な場合は「考」として別に記した。
- 一 各句の解釈は、大意を記す程度にとどめ、批評・鑑賞も必要最小限とした。

一 注釈史上主要な注は▽以下に記した。ただし、その著者及び書名は、初出においてのみフルネームで記し、以下は「川島『新釈』」のように略記した。詳しくは、稿末の「参考文献」を参照されたい。

## 〈承前〉

あゝ立たひとり立たることし哉 貞徳

㊸ 犬子集・山の井・崑山集など

▽ 犬子集・山の井・崑山集など、上五「ありたつた」。類柑子、「ひなひく鳥」には、「あゝたつた」。

この句以下八句、第十二話に「よりく思ひ寄せ

たる小児をも、遊び連にもと爰に集ぬ」として収める十一句に続けて「其引」として加えてある。

注 「あゝたつた」、足が立ったことと、歳月が経った

ことを掛ける。なお、この章段本文は、其角の『類

柑子』中の「ひなひく鳥」の影響が色濃い。

解 ああひとり立ちした、やっとひとりで立ちあがる

ことが出来た。一年余の歳月を経て、その成長を喜ぶ。

▼ 勝峯『評釈』に、「きのふのけふでは一日の隔て

しかない。育つ時もまもないのに、ぼつかり生れて

這ひも坐りも習ひもせず、すつくと、たつた(起立)

ことし(今年)である。それも誰れにも手を取られ

ず、扶け起すものもなく、ひとり(独)で起ちあ

がつたのだ。これが人の子ならば奇蹟である」。川

島『新解』に、「小児が、ようやく立つことが出来

たというのと、年が立つ、すなわち今年が始まった

と、両方に言いかけている」。

子にあくと申人まうすには花もなし

芭蕉

④ 一葉集・類柑子

解 子にはあきたなどと口にするような者には、春の

花、秋の紅葉などを賞する風流心は微塵もない、の

意。

▼ 勝峯『評釈』に、「諺に『貧乏人の子だくさん』

とは云へ、生活苦をその子を育てる上にかこつけて、

うるさがり、厄介がり、厭がる、こども嫌ひには、

咲くにつけ散るにつけ、憂きをはらひ、こゝろを惱

める花のながめ、花の趣を理解することは思ひも寄

らないであらう。飽きるに事をかいて、その子を疎

んずる非人情ながらも、ましてや口外を憚らない

ものには、風流心の持ち合せなどあるまいし、花な

どにかまつてをられまい」。川島『新解』に、「生活

にあえぎ、あるいは清閑を望めば、子ほど邪魔なも

のではない。しかし、子を厄介者視し、口きたなくの

のしつたりするのは、第三者の目には浅ましい限り

である。そのような人は花を賞する資格もない」。

袴着や子の草履とる親心

子堂

㊤ 雑談集・俳諧故人五百題

注 「袴着」、男児五歳の十一月十五日、初めて紋服を着けて産土神うぶすまに参詣する儀式。

解 待ちに待った袴着、この日ばかりは上下を離れ草履取りをかって出る、の意。

▼ 勝峯『評釈』に、「世間への見得ばかりでない。

真にその子の生立ちと行末を祝って、ついえを厭はないで、衣裳を揃へ、本膳もとのへ、宮参りには供となつて扈從する気持で附添つて行く。家を出るとき、社殿で昇降の折は、はきものを穿がせ、脱がせるなど、武家にあつては下賤な草履取の仕事すら、けふはその子のため勤める。これこそ純情な親心である」。

花といへも一ツいへやちいさい子

羅香

㊤ 笈日記

注 株番、『笈日記』抜抄にも記す。七番日記（文化15・4）に、「小坊主よも一ツ笑へ梅の花」。

解 何か言葉らしきものを発した乳呑子、きつと「花」

と言ったはずだ、もう一度言っておくれとせがむ、の意。

▼ 勝峯『評釈』に、「漸く『はな』と発音した小さき努力を、柔かく抱いた腕に躍るその子よりも喜んで、再び云はせようとする『も一つ』の注文と希望に氣を揉む、人の親の心理描写が観点となつてゐる」。川島『新解』に、「幼児がようやく『はな』と発音することの出来たうれしさに、も一つ、も一つと強要する」。

春雨や格子より出す童の手

東来

㊤ 笈日記

注 この句、随斎筆記にも引く。

解 降り続く春雨に、閉じこめられた童児、格子の間から戸外をうかがっている。戸外で自由に遊びたいのである。

▼ 勝峯『評釈』に、「下萌えの大地に濺ぐ雨を、その窓からちかに眺められる、格子に顔をあて、ゝ、簀が通る。傘が行く。戸外の春をうらやましく見てゐる

だが、つと格子から小さい手を伸べて、雨に濡らし、雨にうたせる。いたづらな子のころにも春はみなぎつてゐる」。川島『新解』に、「しとしとと降りくらす春雨に、室内に閉じこめられている子が、戸外恋しく、格子のあいだから小さな白い手を出しているのである」。

早乙女や子のなく方へ植て行 棄捨

㊤ 句兄弟

注 原本、棄捨を葉捨と誤記。

解 田の向う側に子供がつかれているのだから。母親はその子の方に向って、手早に早苗を植え込んで行く、の意。前掲「よりく思ひ寄せたる小児」十一句の第十句に、「涼風の吹く木へ縛る我子哉」。野良へ連れ出した小児の腰にひもをつけ、それを立木や杭などにしばって、そのひもの許す範囲で遊ばせておく。

▼ 勝峯『評釈』に、「畔に寝せてある児が乳を慕つて泣く。笠が声の方へ向く。泥に汚れた手を垂れて

ためらふ。その子の母である。「泣く児に強くころを惹かれながら、再び屈んで苗を挿さねばならぬ。さうした場合の母性心理を洞察して詠んだのである」。川島『新解』に、「この句の芸術性は淡いが、子が泣くからとて、勝手に手を休めて哺乳することなど出来ぬ農婦のきびしい生活の一端が覗れる」。

折とても花の木の間のせがれ哉 其角

㊤ 類柑子・五元集

▽ 類柑子・五元集とも、中七「花の間の」。

解 咲きほこる花の一枝を折り取った者がある。花盗人である。その盗人を詮議してみれば、花の間にひそんでいるわが息子のしわざだった、の意。七番日記(文化8・4)に、「花の木にさつと隠る、悴哉」。▼ 勝峯『評釈』に、「ト枝を惜しげもなく折つた者がある。誰何の声もはげしく見廻すと、咲く花の木蔭に身を窄めて逃げて行く。ちつと見据ゑると、我子の周章で、戸惑ふ姿ではないか。怒りも、握り拳も緩んでしまふ」。川島『新解』に、「花を折る不

届き者を詮議して見ると可愛い息子であった、すなわち、花を折ると言っても、花の中にいるせがれのしたことだ、腹を立てても仕方がない、の意がある。

はしとり初たる日

鴟鳴とや赤子の頬をすふ時に

同(其角)

㊤ 類柑子

▽ 類柑子、「ひなひく鳥」の章では、上五「百舌鳴や」と表記。

注 「はしとり初たる日」、生後百日日めか百二十日めの日に行う「食い初め」。これは夭折した次女三輪の祝い。

解 かわいさあまって、赤子の頬にそっと口びるを寄せた、その瞬間全身にしびれるような感動が走った。その感動を百舌鳥のかん高い声、それを耳にした瞬間の印象に比したのである。

▼ 勝峯『評釈』に、「我が子への愛の強さを、表現する『頬を吸ふ』即ち熱い接吻(くちづけ)を、折から鴟の鳴く、その叫びにひびかせて、吸ふと叫ぶ

を、その一瞬にこゝろのうちに繋ぐ心理描写であるかに思ふ」。川島『新解』に、「頬もふくらかに、食いぞめの日を迎えた我が子に対する愛情の激発の強い接吻と、突如として鳴く秋空の鴟の高音とを、瞬間的に把握している機智は剣道における妙技にも比すべきであろうか」。

去られたる門かどを夜見る幟かな

よみ女  
しらす

㊤ 武玉川

▽ 武玉川、七編「去られても闇に来て見る幟竿」。雨窓閑話(嘉永4)に、「わかれても闇にみにくる幟かな」。

注 七番日記(文化15・5)に、「すみ人しらす」として、「闇紛れそつと見に来る幟哉」とメモ。

解 第十三話本文は、「男にきらはれて、親のもとに住ミけるに、おのが子の初節句見たくも、昼ハ人目茂げレれば」とあり、この句をはさんで、「子を思ふ実情、さもと聞えへて哀也」とある。

▼ 勝峯『評釈』に、「けふはあれの初節句である」。

逢ひたい、ちよつとも逢ひたい、昼はその悩みに  
 苦しみ、夜になつて人目の関のはぐかりもなくなり、  
 その家のほとりをさまよひ、我が子の端午を祝ふ外  
 幟をながめて、すべてを諦めようとする生母の真実  
 な告白である」。

人の親の鳥追けり雀の子

鬼貫

㊤ 鬼貫句選

注 第十三話本文末尾に、「所有畜類是世々親族とな  
 ん。親をしたひ、子を慈む情、何ぞへだてのあるべ  
 きや」とあって、この句以下六句を収めてある。

解 雀の子のために人の親が、の意。

夏山や子にあらはれて鹿の鳴なぐ 五明

㊤ 五明句藻

▽ 上五「草山や」。

注 この句、三韓人にも引く。  
 解 子のためにわが身の危険もかえりみず、の意。

負て出て子にも鳴かする蛙哉

東陽

㊤ 未評

注 この句、迹祭にも記す。

解 実には親子ではなく、雌雄の蛙であろう。

鹿の親笹吹く風にもどりけり

一茶

㊤ 真蹟、一茶・関之両吟歌仙(享和1・6)

▽ 中七「草吹く風に」。御桜、「親鹿は艸吹風に」。  
 希杖本発句集、中七「篠吹く風に」。茶翁聯句集、  
 前書「鹿の子の題をとりて」。

解 親鹿はかすかな風の音をさえ感じて、わが子のも

とえ立ちもどったことだ、の意。

小夜しぐれなくハ子のない鹿に哉がな 一茶

㊤ おらが春初出

注 自筆稿本。「哉」の右肩に濁点を付して、「がな」  
 と読ませ、推量の意に用いる。

解 「小夜しぐれ」の中、鹿の鳴く声がわびしく聞え

る。子を失なった鹿の鳴き声だろうか、の意。

子をかくす藪の廻りや鳴雲雀 (一茶)

㊤ おらが春初出

▽ 七番日記(文化10・3)、「子を捨てる藪を見廻し

／＼てつひに上らぬ夕雲雀哉」。同(12・3)、「子を捨し藪を放れぬ雲雀哉」。

注 雲雀の成鳥は、爪が伸びて樹上に止ることが出来ず、地上に巣を作る。

解 藪の中の巣に子を残した雲雀。わが子の安否を気

づかって、その上空を声をたてて、旋回している。

それは外敵に巢のありかを知らせることになってしまうのだが、の意。

▼ 勝峯『評釈』の「釈」に、「毛吹草の世話に『子をすつれども、身をすつるやぶなし』の古い諺を、

かくまふ(匿)の意の『かくす』に活用したのである」。川島『新解』に、「一茶は『子を捨てる藪はあ

るが身を捨てる藪はない』という俗言を生かそうとして、「試作しているうちに、うそから出たまこと

で、このような実景をつかみ得たのではあるまいか。

俗諺から出立しながら、ここでは『子を捨てる』という概念から放れ得ている。

露の世ハ露の世ながらさりながら 一茶

㊤ おらが春初出

▽ 七番日記(文化14・5)に、「悼」と前書して、

中七「得心ながら」。

注 漢武帝の「秋風辞」の詩句「歡樂極兮哀情多」を

ふまえる「楽しみ極りて愁ひ起るハ、うき世のなら

ひなれど」と書きはじめ第十四話(さと女の死)、

その末尾部に「この期に及んでハ、行水のふたゝび帰らず、散花の梢にもどらぬくひごとなどゝあきらめ顔しても、思ひ切がたきは恩愛のきづな世けり」とある。

とある。

解 この世は露のようにはかないものと十分承知してはいるが、愛媛の死にあつては、どうにも心が治まらない、の意。理をもって制御しがたい情をかかえる人間の本能を詠む。

▼ 吉田『講座』に、「愛子を失ひての句である。露の世とあきらめはあきらめてもさりながらあきらめがたい親子の情である。何といふ素直な句であらう。何といふ心の底の悲しみを訴へた句であらう。何といふ静かな、何といふ崇高い調子の句であらう。無障無碍秋の風のごとく自然な句ではないか。腸を割いて見せた句ではないか」。勝峯『名句評釈』に、「描辞の方から言へば一言一句一音の拔差しを許さぬ緊密さであり、流暢な諧調である。『露の世は』に対して『露の世ながら』と受けた重言法と条件法とが誰の耳にも極めて自然に流れ込むし、更に『さりながら』と逆語法を以て反撥した句法も極めて自然に享け入れられるし、その次に来るべき説明語が省略されて居て、しかも誰の思想にも順当にそれが領得されて余蘊が無い。「是より先文化十四年作に『露の世は得心ながらさりながら』の句がある。それを再び持廻ったとすれば、更にこの句の価値を減殺するであらう」。勝峯『評釈』に、「露の世の露は後れさきだつたためしとしても、それは喩へであつて

此の世の実相ではないから、露の世とだけでは諦められぬ。此世への執着が残ることになる。『さりながら』が一茶の人間のな述懐になるのだが、七番日記に『悼』の題で『露の世は得心ながらさりながら』の先案があつて、この句はその再考なのである」。伊藤『一茶集』に、「誰か別人を悼んだ旧作なのを、さと女の死に臨んで改作転用したのである」。川島『新解』に、「あきらめてもあきらめ切れぬ果てしなき愛執の思いを、露の世・露の世ながら・さりながらと、二重の重語と環状的表現によって、輪廻の相さながらに余情に訴えている。(略)中七を替えて転用したのであって、老境に得た最愛のさと女をうしなつた悲嘆の深さは疑うべくもないが、さと女の愛の記録とその死とを対照的に叙した、『おらが春』構成上の山として一卷を飾ろうとしている一茶の意欲のたくましさ。心を蕩かす愛の記にしても、果てしなき暗愁の籠つたこの悼句にしても、そのうしろには、いかなる事物をも逃すまいとしている文芸作家の冷厳な眼が感ぜられて、一道に執する者の宿命



を、むしろ心寒いものに思われる」。栗山『名句評釈』に、『露の世は露の世ながらさりながら』と同語反復による纏いつくような律調は、重く沈澱する悲哀をそのままにしみ出させている。その点『得心ながら』を改めたのはうなずけよう。加藤『秀句』に、『露の世』と現世を考え、彼岸に迎えとられた吾が子だと感ずる一応の構えが、人情に惹かれる氣持の前に自ずと崩れてゆく。「この句は燃焼を経た詩の世界、生きた時間の魅力ではない。市井人の人情に殉ずる生の魅力だ。だから惹かれたあとに未練の思いを淬のようにとどめるのである」。

〈以下、「其引」として引く落楮ほかの八句とよみしらずほかの三首の注解は省略する〉

頌 曰ク

未<sup>ダ</sup>拳<sup>レ</sup>歩<sup>テ</sup>時<sup>ツ</sup>先<sup>ニ</sup>已到<sup>ル</sup> 未<sup>ダ</sup>動<sup>レ</sup>舌<sup>カ</sup>時<sup>ツ</sup>先<sup>ニ</sup>説<sup>キ</sup>了<sup>ル</sup>  
直<sup>タ</sup>饒<sup>ト</sup>著<sup>ル</sup>々<sup>モ</sup>在<sup>ル</sup>機<sup>ニ</sup>先<sup>ニ</sup> 更<sup>ニ</sup>須<sup>ク</sup>知<sup>ル</sup>有<sup>ル</sup>向<sup>上</sup>上<sup>ノ</sup>竅<sup>ノ</sup>

貫ふよりはやくうしなふ扇かな 一茶

㊦ 七番日記 (文化12・6)

▽ 七番日記 (文化12・6)、「又扇貫ふやいなやおとしけり」。同(15・4)、中七「早くなくなる」。

注 「頌」、本文に対する賛語、の意。梵語「偈陀」の訳。この頌は『無門関』第四十八則、乾峰・雲門両和尚の公案に対する慧開和尚の賛語。「未ダ歩ミヲ拳セザル時、先ツ已ニ到ル。未ダ舌ヲ動カサザル時、先ツ説キ了ル。直<sup>タ</sup>饒<sup>ト</sup>著<sup>ル</sup>々<sup>モ</sup>機<sup>ニ</sup>先<sup>ニ</sup>アルモ、更ニスベカラク向上の竅ニアルヲ知ルベジ」とよむ。

解 慧開の賛に言う賢者の世界とは対照的な凡愚の世界。

▼ 勝峯『評釈』に、「疎忽な自分を天窓をかきながら笑つて、そこ、と扇のゆくへを捜して見たが、遂に知れなかつた後悔を詠んで、無門関の語にふれてゐる」。川島『新解』に、「前章は独立しているのであるが、しかし、慧開和尚の頌から反射的に凡愚の境を言ったものであろう。間髪を入れぬ禪的機知の躍動ならで、これは貫つたばかりの扇を落してしまつた、というので、前章と対照させて見ると、い

ちじるしい賢愚の開きを飛びこえて、作者の機知の閃が見られる」。加藤『秀句』に、「たしかに扇にはこういうところがある。しかし、それは一種の人情の弱点を衝く穿ちの性質を帯びた発想で、一茶の好んで詠んだところである。しかし、句として大切なのは穿ったところだけでなく、どう心が燃焼したかというところだ」。

俄川とんで見せけり鹿の親

、(一茶)

㊤ 八番日記(文政2・9)

▽ 「俄川を飛で見せけり」

解 「貫ふより」「俄川」この二句、慧開和尚の頌を受ける。雨後の水たまり。鹿の俊敏な動きは、乾峰・雲門両和尚の頭腦の働きにも似て、の意。

▼ 勝峯『評釈』に、「五月雨の頃など、溢れ水が落ちて低みに濁りをつくり、それが遽かに枝川となるやうな場合がある。弱々しい脛をもつ仔鹿がそこへ来て、たち竦んで了ふのを親鹿が、一ト跳ね、ぼんと飛び越えて見せて、仔鹿を勇氣づけ、はげまして

るる風景である。「ちよつと驟雨などで掘れたり、たまつたりした水ではない。枝川としての存在をつづける俄川でなければならぬ。この句も無門関に内面的交渉を持つている」。

大寺や扇でしれし小僧の名

、(一茶)

㊤ おらが春初出

▽ 八番日記(文政2・9)、上五「山寺や」。

解 日記に、上五「山寺や」と記し、おらが春に収める段に、「大寺や」と改めた。何人もの修行僧を容する「大寺」にあつてこそ、持物に記名が必要となる。

曲者隠れてうかゞふ図

あばれ蚊のついと古井二忍びけり

、(一茶)

㊤ おらが春初出

▽ 八番日記(文政2・8)、中七「こそと古井に」。

注 「あばれ蚊」、秋の残り蚊。あふれ蚊とも。

解 身近くに蚊の鳴音、手を伸ばした瞬間、「ついつ

とかわされてしまった、の意。「あばれ蚊」の動きを曲者に擬し、前書きを付して画賛句のように仕立てたのであろう。改作はおらが春執筆時。

▼ 勝峯『評釈』に、「『ついと』でその隠るゝ利那を活写してゐる。曲者は盗みか意趣か、害心を抱いて忍び入つたもので、それを凶暴なあばれかたにたとえたのだ」。川島『新解』に、「前書のごとく画賛句である。憎まれ者の蚊、殊に、秋になってゆだんしている時に、ふいに襲われる残り蚊の性わるさを、曲者の凶悪に擬したのである」。

大山詣

四五間の木太刀をかつぐ恰かな 〵 (一茶)

㊤ おらが春初出

▽ 八番日記(文政2・9)、上五「三間の」。

注 「大山詣」、相模国(神奈川県)中郡の雨降山あふりの石

尊大権現に詣ること。六月二十八日に山を開き、心願のあるものは木太刀に大願成就と記して奉納した。

『十八大通』に、下野屋十右衛門(祇園)は、三間

半ほどの木太刀を作り、若い者四、五十人に揃いのゆかたを着せて大山詣にくり出し、品川の宿の入口まで来たところ、身分不相応と召し捕りの役人が追いかけて来て縄をかけた、と見える。

解 四、五間もあろうか、大きな木太刀を若い者にかつがせて、大山詣にくり出した者もあったと聞く、の意。上五の改作はおらが春執筆時。

太郎冠者まがひに通る扇かな 〵 (一茶)

㊤ 八番日記(文政2・6)

解 扇を顔のあたりにかざして、強い日ざしをさけて行く男、それを狂言の「太郎冠者まがひ」と見たたのである。

▼ 勝峯『評釈』に、「女ならなく衣紋をうしろにぬき、ちよこんと扇をつまんで気隙な、厭味な、その頃の粹人風俗を、一喝、太郎冠者気取りのぶざけた野郎だ。さう罵つて『げえ』と溜飲を下げる一茶の憤慨さが『まがひ』の一語に迸つてゐる」「此の句はその『まがひ』者に唾液を引つかけるのである」。

紫の里近きあたり、とある門に、炭団程なる黒き  
巢鳥をとりて、籠伏せして有りけるに、其夜親鳥ら  
しく、夜すがら其家の上に鳴ける哀さに、

子を思ふ闇やかハゆい〜と

声を鳥の鳴あかすらん 一茶

㊸ おらが春初出

▽ 七番日記(文化15・6)、「子に迷ふ闇の夜終<sup>よすがら</sup>大声  
になくや鳥のかはい〜と」。

注 「紫の里」、長野県上高井郡高山村紫。「声を鳥」、

「声を枯らす」に言い掛けてある。

解 「子を思う親の心は闇」、捕えられたわが子の安否  
を心配して、親鳥は声が枯れるほど鳴き続けている。

盗人、おのが古郷に隠れて縛れしに

業の鳥罾を巡るやむら時雨 一茶

㊸ 方言雑集(がうの鳥)

注 「業の鳥」、罾にかかる「業」を背負った鳥。

解 罾にかからなければならぬ「業」を背負った鳥

が、その罾のまわりを巡っている、の意。縄をのが  
れて、故郷に身をかくす「盗人」を鳥に擬したので  
ある。

▼ 勝峯『評釈』に、「業の鳥は盗人の悪業を行って  
苦しむに擬し、罾はその故郷にて報いを受ける因果  
を寓してある。時雨に罪の呵責である。必ず落ち込  
む罾のめぐりははなれず、我れにもあらで廻るのが  
悪業の報いなのである」。川島『新釈』に、「ここで  
は『業の鳥』は、悪業を重ねて来たために、その罪  
の報いを受けなければならぬ盗人を意味し、『罾』  
は、郷愁のために引きよせられる故郷である。その  
鳥をうちたく『むら時雨』は、懲罰そのものとも  
たとえられるのであるが、このむら時雨のために、  
前書からはなれても、蕭条たる自然を背景として、  
運命の終局におもむきつつある小鳥の姿を、あわれ  
に思いやられる」。

御成り場所に、鳥どもの餌蒔をしたふ不<sup>體</sup>便さに、  
人昵き鶴よどちらに箭があたる 一茶

㊦ おらが春初出

▽ 八番日記(文政2・3)、中七以下「鶴よ御役に  
どれが立」。

注 「御成」、将軍出遊の獵場。朝廷に献上するための  
鶴を獲るために、十一月下旬から十二月にかけて行  
なわれた鷹狩り。小松川・亀有など。

解 人見知りをせず、蒔餌に誘われて寄って来た二羽  
の鶴、そのうちのどの一羽かに箭があたるはずだ、の  
意。

▼ 勝峯『評釈』に、「人に欺かれ、餌に瞞されて、  
不惑にも今のやがて射殺されのを知らないである。  
あの二羽の孰れに最初の箭があたるであらうか」  
「運命とはいへ、二羽の鶴はますく近寄るばかり  
である」。

箭の下に母の乳を呑む鹿子哉

立志

㊦ 俳諧古選

注 作者・立志の俳号は第五世まで嗣号され、この句  
の作者はその何世に当たるか不明。おらが春第十五

話、この句のあとに、「さすがのさつ男も髻切りし  
ハ、かゝるおりにをなんありける」とある。「さつ男」、  
獵男・狩人。「髻」を切る、剃髪出家を意味する。

解 獵男の放った箭が鹿に向って飛ぶ。その鹿の腹下  
で、何も知らない子鹿は乳房を離れない。

▼ 勝峯『評釈』に、「草を染めてあはれ母鹿は仆れ  
てゐる。狙はれた箭は急所にぐさつと刺つている。  
仔鹿は母の死を知らない。箭の羽の時に風に揺らぐ  
下で、無心に母の乳房を求めて吸ふ。母鹿は射られ  
てすぐ仆れたのでなく、痛手をこらへて暫らく遁れ  
てから命を落したのであらう。さう見ないと『乳を  
呑む』仔鹿が拵らへごとくなる」。川島『新解』に、  
「キリキリと引きしほられた弓、今や放たれんとす  
る箭の先に、瞬間にして消される命とも知らず、平  
和を享受している親鹿・子鹿の姿」。

九輪草四五りん草で仕廻けり

一茶

㊦ おらが春初出

注 おらが春第十六話、「おのれ住る郷ハ、おく信濃

黒姫山のだらだら下りの小隅なれば、雪は夏（え）きへて、霜ハ秋降る物から、橘のからたちとなるのミならで、万木千草上々国よりうつし植るに、ことごとく変じざるハなかりけり」とあって、この句を添える。「九輪草」、桜草の一種。塔の九輪に似て、層状に花をつけることからいう。

解 奥信濃の気候はきびしく、九輪草も十分に咲き誇ることが出来ず、四五輪草で終わってしまう、の意。

▼ 黒沢『研究』に、「斯うした信濃の山に育つ草花などは、とても充分な成長はとげられない、九重咲きの花でも成長悪く、貧しく斯く四五輪で衰れや霜に枯れて了ふのです。勝峯『評釈』に、「九輪草の美しい花の層も、なんとこゝでは貧弱な四五輪で咲きすくんで了ふのである。あはれにも見窄らしい花となる。これが我が郷土相なのである」。川島『新解』に、「九輪草と名づけられて、本来は何段にも咲きのぼるべき花なのであるが、この土地では四五輪草くらいところで、おしまいになってしまつ、の意」。

鎮西八郎為朝、人礫うつ所に  
時鳥蠅虫めらもよつく聞け 〵 (一茶)

㊸ おらが春初出

注 梅翁宗因発句集に、「ほとゝぎすいかに鬼神もたしかに聞け」。

解 画賛句であろう。戦場の名乗の俳諧化。

▼ 勝峯『評釈』に、「大の男を手玉に取つて、掴むは、投げるはの為朝の武勇をたゝへた句で、さうした画の賛にでも詠んだのであらう」。川島『新釈』に、「ヤアヤア遠からん者はおとにも聞け、近くば寄つて目にも見よ」とほとんど俗言化している戦場の名乗りを利かせたのである」。

鹿の子や横にくはへし萩の花 〵 (一茶)

㊸ おらが春初出

▽ 七番日記(文化14・9)、「鰐口ニちよいとくはへし紅葉哉」。

解 子鹿が萩の小枝をくわえて、ぴよんと姿をあらわ

した。七番日記の初案に比し、萩と鹿のとりあわせによって、鮮明な印象を与えることになったが、実景ではなからう。

▼ 勝峯『評釈』に、「一ト枝の萩がなよく撓ひつゝ、鹿の子の優しい口にしつかりと啣へられて、その花の紫にちりこぼるゝ状」「鹿の子と萩の美しい配合にもよるが、啣へる萩が『横』にその枝の長さを均斉させてをり、又その『横』が鹿の丈けを額縁的によき輪廓をたもつてゐる」。川島『新解』に、「萩と鹿のとりあわせは常套化しているが、これは無邪気な小鹿であり、横にくわえたところが写実的で、非常に美しく可憐な印象を与える」。

老翁岩に腰かけて一軸をさづくる図に

我汝を待こと久しほとゝぎす 一茶

㊤ 七番日記(文化7・4)

▽ 七番日記(文化14・3)、魚淵宛書簡(文化14・4・3)に重出。

注 「老翁岩に腰かけて」、「史記」の「黄石公が下邳

の橋で、長良に兵法の書を授けたとき」の故事による。

解 史記の故事をふまえ、ほととぎすの初音を待ちこがれる気持を詠んだ。

▼ 勝峯『評釈』に、「画中の人物をして我れと口を開かする意図が既に痛快である」「不生出の英雄とたまたま啼くに過ぎない時鳥をめづらしむ意を対比したのである。前書が我れと時鳥を黄石公と張良とにあてしめるのである。その前書を除くとも一句の独立性を失はない叙法が画賛の特徴である。その場合には無名の風流心ある老人が、時鳥の鳴き出るを待焦れてゐた事になる」。

幽 栖

我家に恰好鳥の鳴にけり 一茶

㊤ おらが春初出

▽ 八番日記(文政2・5)、上五「我藪の」。

解 閑古鳥を我家に「恰好」な鳥といい掛けた。

▼ 勝峯『評釈』に、「人並な村住りであるが、幽静

な此の草庵にあれば、山林に姿をかくせるが如くである。此の栖に恰好な、即ち相適する鳥の鳴くのは甚だうれしい。それが郭公である」。

二三遍人をきよくつて行蛩 〵 (一茶)

㊥ おらが春初出

▽ 八番日記(文政2・1)、「よい程に我を曲れよはつ蛩」。同(2・2、聞4)、「初蛩我を曲て走りけり」。

解 「二三遍、手のとどきそうなところで、人をからかうようにして飛び去って行く蛩」の意。

▼ 勝峯『評釈』に、「近寄つては、すうつと遠のき、遠のいては復、ふうわり近寄る蛩は、さア、とられるものなら捕つて見るがいゝ、そんな風に見える」「この年寄をあなどつて、二遍も三遍もはなさきへ来て、とう／＼遠くへ行つてしまつたわい。と云つた情景でもあらうか」。

飛蛩其手ハくハぬくハぬとや 〵 (一茶)

㊥ おらが春初出

▽ おらが春、第七話末尾部に「はつ蛩其手はくいぬとびぶりや」(前出)。七番日記(文化7・5)、「とぶ蛩うはの空呼したりけり」。同(10・6)、「我声が聞へぬかして行蛩」。八番日記(文政2・8)、「皷声の其手はくはの蛩かな」。

注 「其手」、増補『俚言集覽』に、「江戸の小児、ほウたるこゑ、山路こゑ、あんどのひかりでちよいとみてこゑといふ」。

▼ 勝峯『評釈』に、「一茶は一向に厭きる容子もなく、かうした俚諺を繰り返してゐるが、あまりたび／＼使はれては、第三者の方がうんざり退屈して来る」。

つの国の何を申も枯木立 〵 (一茶)

㊥ おらが春初出

注 前書に「成蹊子、こそぞの冬つひに不言人と成りしとなん。鶯笠のもとより、此ごろ申おこせしに」とある。「成蹊子」、随斎筆紀に、数句を手抄し、「東



都」と記す。原本上白に、「史記李広伝が賛「桃李不言下自成蹊」と記してある。「鶯笠」、田川氏。対竹・鳳朗。その著『芭蕉葉船』は一茶の校。「つの国」は「何」にかかる枕詞。新古今集、巻六に「津の国の難波の春は夢なれや芦の枯葉に風わたるなり」(西行)。

解 新古今の西行歌をふまえ、この期に及んで何を言っても詮方ないこと、葉を落した桃李に夏の影をしのぶ思いだ、の意。

▼ 勝峯『評釈』に、「成蹊その人は、枯木立の如く最早生命を存じないのである。津の国の何に掛かる枕詞を以て成蹊を吊つた句である」。川島『新解』に、「今更何を言っても夢と過てしまったことで、成蹊子の号の由来を成す桃李もさびしい枯木立となつてしまった、というほどの意」。

白笠を少さますや木下陰 〵 (一茶)

㊤ 文化十四年七月十四日付、宛先未詳の書簡(一茶 佛集所収)。

注 「白笠」、まだ日にやけていない旅の笠。新しい松笠。

解 出立して間もないのだが、暑さに耐えかねて、木陰で一息入れる、の意。笠の主は作者自身とみたい。

▼ 勝峯『評釈』に、「ふと下陰に入つてその笠を脱ぐ。荷を卸したやうな軽い気持になる。みどりの枝にかけて笠の緒に汗が染みてゐる。緑蔭の憩ひは笠のほとぼりをさまして、再びかぶる天窓を爽やかにする」。川島『新解』に、「暑気にあえぐ旅人が木かげに立寄つて、まず笠をぬぎ汗をぬぐつて一息入れる」。

まかり出たるハ此藪の墓ニて候 〵 (一茶)

㊤ 八番日記(文政2・7)

▽ 八番日記「曲出るは」。

注 狂言『餅酒』に、「まかり出たる者は、加賀の国のお百姓でござる」。

解 藪の片隅から、のそつと這い出した墓、いかにも「まかり出たるは」と名乗り顔である、の意。

▼ 暉峻『名句の鑑賞』に、「のそりのそりと藪から

這ひ出てくる墓の風貌は、如何にもこの勿体ぶつた  
 謠曲調で適切に表現されております」。勝峯『評釈』  
 に、「尻声をながく引いて、頬をとぼけてふくらま  
 せる、狂言の口上の罷り出たるは、其角の『ひきが  
 へる』（筆者注、鶯にまかり出たよ引蟾）が早く先  
 取権を握つてゐる。此の墓は其角のやうに鶯に誘は  
 れて現はれたのではなく、我が一茶の前にのそり  
 く、這ひ出たのである」。川島『新解』に、「人並に  
 夕涼みの庭に近く這いだしてきた墓の面がまえは、  
 『これは藪のもとひきがえる何世の孫にて候』と  
 名のり顔である」。

雲を吐く口つきしたり引墓 一茶

㊤ おらが春初出

注 八番日記（文政2・9）、「霧に乘目付して居る墓  
 かな」。第六話に、「此もの、諸越の仙人ニ飛行自在  
 の術ををしへ」。

解 墓は何となく妖気を感じさせるのだが、これはい

かにも天に向つて雲を吐かんとするさまに見える。

▼ 暉峻『名句の鑑賞』に、「黒褐色で疣のある無気  
 味な肢体、その緩漫な動作、湿つぽく暗いその居所、  
 何一つ不気味でないものはありません。そのグロテ  
 スクな墓が、口をぼつくりと上向に開けて、喉を震  
 はしてゐる様は、如何にも一茶のいふ通り、雲でも  
 吐き出しさうであります」。勝峯『評釈』に、「俗に  
 墓口といふだけあつて、大きな口を顎まで開いたと  
 したら、一茶ならずとも『雲を吐く』感じを受ける  
 と思ふ。雲を吐いたその上には、呪印を結びつゝ自  
 雷也が絵双紙のやうに現れる、空想に魅せられもす  
 るであらう」。川島『新解』に、「芝居では、大がま  
 の吐く妖気に乗って自雷也が出現するのであるが、  
 殊に草双紙の『自雷也豪傑物語』は、場所を信越に  
 取り、発端自雷也が妙高山において蝦蟇の術を授け  
 られるところから、後に黒姫山の大蛇丸の山塞を攻  
 めるなど、すべて柏原辺から指呼の題材を求めてい  
 る」「この句の発想のうらには、それらのものがあ  
 ると思われるが、それはそれとして、『雲を吐く口

つき』には、どっしりとかまえこんだ大がまの風格があらわれている」。

赤い葉の栄耀ニちるや夏木立 〃 (一茶)

㊤ おらが春初出

▽ 七番日記(文化7・8)、「折ふしや栄よう二見へてちるわか葉」。

注 「赤い葉」、病葉。わくらば。「栄耀」、誇らしいさま、をいう。

解 森森たる青葉の梢から、病葉が一枚陽光に照され、輝きをもって落下する。それは栄耀がましく散らすのだ、と見る。

▼ 勝峯『評釈』に、「滴たる緑にかゞやく夏木の或るものが、葉を赤く染めるのは病的現象である。俳諧では病葉(わくらば)と云つて季語とするが、一茶はそれを承知の上で、赤い葉をその木の性格にもとづけて、栄耀がましい誇りに散らすのだと逆説して、栄耀をほかの木への見栄と解することを望むのである」。

稲妻や一切ツ、に世が直る 一茶

㊤ おらが春初出

▽ 八番日記(文政2・7)、座五「世がなふり」<sup>㊤</sup>。

注 「世が直る」、勝峯『評釈』、川島『新解』など、

豊作、それによって米価のさがる意に解するが、こは世の中のゆきづまった制度や、乱れた風紀などを整える意に解したい。

解 稲妻の一閃ごとに、それを受け乱れた世相が整ってゆく、の意。一茶の時代や社会に対する批判精神を見のがせない。

▼ 勝峯『評釈』に、「『世が直る』は、(略)米価が安くなること及びそれを望む世間の声である」。川島『新解』に、「対外関係に影響されなかった時代には、米価が景気を左右することは現代以上であったろうが、特に生産と直結する農民が、実りの時期における天象への関心の深さは、今も昔も変りないものであろう。稲妻の一閃々々に、美事に花を持った稲田を前にしている農民たちが、期待に胸をふく

らませている様を思いやらされる。

石川ハぐハらり稲妻さらり哉 〵 (一茶)

㊤ 梅塵本八番日記(文政2)

▽ 八番日記(文政2・7)、中七以下「桑原稲妻さ  
かり哉」。

解 「くハらり」「さらり」のいわば言語遊戯と解した  
い。

▼ 勝峯『評釈』に、「天氣が晴れるの『くわらり』  
である。漢字の闊然をその訳語にあてゝいゝ。稲妻  
の瞬間的な閃きの『さらり』で、水涵れの川原が照  
されて、すぐ闇に窄んで了ふ。磊々たる石だけが印  
象に入る夜景である。『くわらり』は石のやうな堅  
さでひゞき、『さらり』は卒気なく弱い語調である。  
稲妻に迫力はないが、石川の白い全貌が臉に灼けつ  
くやうな描写である」。川島『新解』に、「水筋が細  
く通っているばかりで、広い河原一面、小石が白々  
と乾いた肌をさらしている。その河原がサツと稲妻  
に照し出される刹那のからりとした荒涼感。くわら

り・さらりという言葉のリズムによって、断続する  
稲妻と、明滅する河原のけしきが交互にめまぐるし  
く展開されている」。

夕霧や馬の覚へし橋の穴 〵 (一茶)

㊤ 八番日記(文政2・9)

注 「馬の覚<sub>え</sub>へし、俚言集覽に、「韓非子云、管仲從<sub>二</sub>  
桓公<sub>一</sub>、伐<sub>三</sub>孤竹<sub>一</sub>、春往冬還、迷惑失<sub>レ</sub>道、管仲曰老馬  
之智可<sub>レ</sub>用也。乃放<sub>三</sub>老馬<sub>一</sub>而隨<sub>レ</sub>之遂得<sub>レ</sub>道。又朗詠  
の詩に、雪牛放<sub>レ</sub>馬朝尋<sub>レ</sub>跡、歌に、夕されば道も見  
えねどふるさとはもときし駒にまかせてぞ行」。

解 韓非子の故事をふまえる。広い意味での漢文俳訳。  
▼ 勝峯『評釈』に、「曳<sub>く</sub>か乗<sub>る</sub>かしてこの橋は通<sub>つ</sub>  
たことがある。句外に残された馬の持主はその時、  
あぶないと膽を冷したことを忘れてる。此の馬だけ  
が記憶してゐる。はい、どう、行<sub>け</sub>の進号をかけて  
も、霧の中にびたりと止つて動かない。(略)馬の  
勘のよさ、知覚のたしかさに危険を未然に防いだの  
である」。川島『新解』に、「あるところまで来ると、

馬は用心深そうに前足のひずめを立てて、穴のある個所を上手によけていくのであった。俗に『馬の物おほえたようだ』といわれるくらい、馬は知覚のたしかな動物である。萩原『新釈』に、「橋の穴というのは、木橋が古くなると、橋板に穴があく。(略)馬はいつもその橋を通りなれているので、どの辺に穴があるということをよく覚えていて、夕霧のかかっている中にも、誤をせず歩くというのである。加藤『秀句』に、「夕霧の中家路をたどっている野良帰りの馬であろう。毎日渡る橋を覚えて、教えられないでもよけてゆくのである。『夕霧』が秋の灯の点々と滲む視界を生かしているが、『橋の穴』に対して少し理詰め動きになっているところが難である」。

秋風二歩で逃る蜚かな 一茶

④ 七番日記(文化10・8)

▽ 八番日記(文政2・7)にも。中七は「歩行で逃る」と表記。

解 秋風吹く季節、生き残った蜚だが、低い気温に飛

ぶことも出来ず、の意。「考」参照。

▼ 川島『新釈』に、「昼間の蜚である。夏の夜の景物である蜚を、昼間、然も秋風の中に見出して居ることが既に珍しく、傷しい感じを伴ふ。首筋の赤い黒い小さな蜚が、何物かに追はれるやうに、それも飛ぶ性質を持つ蜚が足早に歩いて逃げて行く姿は、いかにも秋風のすさまじさを思はせる」。暉峻『名句の鑑賞』に、「蜚は夏の景物であり、しかも夜光りながら飛ぶ様を見てこそ美しく楽しいものであります。が、夏も過ぎて衰へた蜚が、秋風の吹く明るい真昼、追はれるやうに草葉の蔭を這うてゐる様は、哀にもいたましい姿であります。(略)秋風の中に見出した著想も珍しく、又『歩いて逃る』といふ中七字の写生も動かす可からざるものであります」。勝峯『評釈』に、「(略)それでも土に吹き落されず、葉から葉への光りの点滅を一茶は歩くと思たのである。光りの線を引いて飛べばこそ、逃げるとも云へるけれど、こんなよろ／＼芋虫のやうな歩き振りで逃げるとは形容されないが、その歩いて逃げると

見立たのが残る蛍の特徴を押へてゐる」。川島『新解』に、「その手はくわぬくわぬと、夏の夜空の景物であった蛍も、秋風におとろえて飛ぶ力もなく、暈のへりなどを、もぞもぞと這っていくあわれさ。

これは昼間の蛍である」。丸山『一茶』に、「これも桂好亭に病臥中の作である。(略)前筋の赤い小さな蛍が、風に追われるように逃げて行く姿は、あわれである。『歩いて逃る』に、気力も萎えた蛍の生態が活写されている。しかも、この時身動きもできぬ病床に臥していた一茶の境涯を念頭において、この句に対すると、一層哀愁の感が深く、秋風も一種凄愴の色を帯びてくる。もはや、秋の蛍への哀憐を詠んだだけの句ではない。」

考 帰住早々の文化十年六月十八日、善光寺の門人・上原文路(桂好亭)で悪性の腫物を病み七十五日の病臥をよぎなくされた。『志多良』には、「桂好亭にわづらふこと七十五日にして、九月五日といふに、節にすがりて、霜がれの虫の這ふやうに、二足三脚歩きては一息つき、四足七脚運びては臍をさすり」

と記し、「かな釘のやうな手足を秋の風」を添えている。

一茶は眼前の飛ぶことも出来ずに、這ばかりの蛍に、衰残の自身の境涯を重ねたのである。季語の「秋風」、北信濃の秋風が持つ冷たくさびしい風情が、一句の統一原理としてよく働いている。

### 二番休

乳呑子の風よけに立かゞし哉 〵 (一茶)

㊸ 八番日記(文政2・7)

▽ 梅塵本八番日記(文政2)、中七「風除にする」。

注 「二番休」、野良仕事などで、終業直前にとる午後二度めの小休息。

解 稲刈の時期、二番休みに野良に伴い蒿葛籠に寝かせておいた乳幼児に授乳する農婦の姿。一茶はそこに、人間本来あるべき姿を見てほっとするのである。「横乗の馬のつゞくや夕雲雀」「はつ爪を引とらまへて寝た子哉」「蚤の迹かぞへながらに添乳哉」などと併せ解すべきである。

▼ 勝峯『評釈』に、「家からにして野良ではたらく家族的団欒を安山子の周辺に展開させ、母の乳を慕ふ子をせめて荒い野良の風にあてさせないこゝろ遣ひである。その案山子のかげで、昼休みのひと時を飽きるまで乳を吸はせる情景を案じて、風除けの

効果を大寫した句である」。川島『新解』に、「早朝から働く耕作者は昼飯も早いので、これは昼休みの次の午後の小休みであろう。親も子もそれを待ちかねて、いそいで乳房をふくませるのである。出来秋の野風も赤子の肌には荒過ぎるので、かかしを風よけにして田の畔に座どるなど、いかにもありそうな田園風景であるが、一茶のあたじけなさは、一度つかまえた題材なり着想なりに執して、蒸し返しするので、結果としてはいずれも鑑賞を鈍くさせられるのである」。

連にはぐれて

一人通ると壁に書く秋の暮、(一茶)

㊦ 八番日記(文政2・6、7)・だん袋

解 道中をともにしていた人物とはぐれ、「一人通ると、道辺の壁に書きつけて先を急いだ、の意。座五「秋の暮」に、先を急ぐ気持と、不安でさびしい気持が表現されている。

▼ 勝峯『評釈』に、「うしろから跟いてきた筈の道連れが、どこで紛れたやら、振り向いても見えない。さつきから大分待ちくたびれてゐる。先へ行く気づかいはない。(略)こんなところで、いつまでもぼんやり佇つてゐたつて詰らない。よし、此の家の壁をちよつと借用して書いておかう」。川島『新解』に「行脚の折に、連れと共に物語でなどしているうちに、はぐれてしまったので、予定してあったところへ先行するとて、目につきやすい道ばたの土塀などを告知板代りとして、連れに書き残して行ったというような場合である」。

考 文政二年六月、湯田中・浅野・毛野などを巡廻、

日記には他郷七日、在庵二十三日と記している。同年七月も湯田中・東出・赤川・二倉などを廻り、日記には在庵二十七日、他家二日と記している。いず

れも近隣、道連れをたよるほどの旅ではなく、この句は過去の行脚中の出来事を回想したものと考えてよい。

七月七日 墓詣

一念仏申すだけしく芒哉

、(一茶)

㊤ おらが春初出

▽ 八番日記(文政2・8)、中七「申程して」。

注 八番日記、「七晴 小雨夜晴 墓詣」。川島『新解』

矢羽岩波文庫の注に、「さと女没後一七日目」と注

するが、これは「七日盆」で、この日墓掃除をし、

盆を迎える準備をするのである。十七日目に墓詣を

する意味も慣習もない。なお、一茶一族の墓(本家・

弥市家の所有)は、明専寺裏手の小丸山にある。た

だし、さと女はその傍に埋葬。

解 ちょっと合掌・一念仏申す間、墓前の薄を折り伏せ、

その上にひざをつき、の意。

▼ 勝峯『評釈』に、「草の花咲く丘の小高み、泣き

くさと女を葬つた土の肌が赤く、それから半月ば

かり立つたけふ、誰れの忌日にあたる訳ではないが、盆時に行ふ世間並の墓参りである。穂を抜く芒が墓のぐるりにはびこつてゐる。手で押し分け、薙ぎ伏せて、その上に膝を屈めて、先霊への廻向のために、敬虔に唱へる念仏である」。川島『新解』に、「忌日ではなかったが、盂蘭盆も近付いたので、心ゆかせに墓参したのであらう。念仏申すあいだけ墓のかたわらの薄を折り伏せて、その上にひざまずいたのである」。

木啄のやめて聞かよ夕木魚

、(一茶)

㊤ おらが春初出

▽ 八番日記(文政2・7)、上五「木啄も」。

解 木啄の木をつつく音がやんだ。木啄も日没勤行の

木魚の音に、耳をかたむけているのだらう、の意。

▼ 勝峯『評釈』に、「鋭いくちばしで樹肌をつく

音が、堅い板を叩くやうに聞える。その啄木鳥のく

ちばしの音かばつり止んだ。(略)『てらつゝきの名

がある伝説の鳥も、仏法興隆の今は夕勤めの木魚の



鳴る間は、くちばしを休めてちつと信仰的に聞き入つてゐるからであらうか。それに違ひない意を『かよ』の語に託してゐる。川島『新解』に、「ぼくぼくと夕方のおつとめの木魚の音が聞えている。気がつくつと、先刻までコツコツと木の幹を物色していたらしい啄木鳥の気配が止んでいたので、『ホウあれも聞いているのか』と、実は作者自身が夕ぐれの静けさの中に、しんみりと木魚の音に聞き入っている気持である。物部守屋の怨霊がこの鳥と化して、寺の軒をつつきこわしたという伝説の鳥であるが、仏法興隆の今(略)というような解釈は行き過ぎである」。

木つゝきが目利して居る庵哉　　、(一茶)

㊦ おらが春初出

▽ 八番日記(文政2・7)、上五・中七「木啄の目利して見る」。

注 「目利」、鑑定・値ぶみ、の意。

解 木啄が古びたわが家の蔀板を値ぶみでもするよう

に、しきりにつつく、の意。八番日記、文政二年正月の条にも「鶯の目利してなくわが家哉」が見える。

▼ 勝峯『評釈』に、「尺取虫までが侮つて目利したほそ柱で支えた草案である。啄木鳥がこれでも安心して住つてをれるかと危がつて、その安全性を試みるため、あゝしてやつて来てはこつゝ／＼敲いて見るのである。(略)此の啄木鳥はあながち直接に柱をたゝかずとも、近くの木々をつゝき廻つてゐるくちばしの音を聞いて、皮肉な自嘲句となつたのだと解されもする」。川島『新解』に、「木つつきが稀に我が家の柱などをコツコツとやっているのを、家の古びかげん・価値などを鑑定していると言つたので『虫に迄尺とられけり』と同列の皮肉なユーモアである」。

#### 経堂

虫の尻を指して笑ひ仏哉

、(一茶)

㊦ 八番日記(文政2・7)。

注 「経堂」、寺院などで、一切経を納める小堂。経堂

には多く傳大師と普建・普成二子の像を安置する。このうち、普建の像は、笑いながら指さす形をしていることから「笑いぼとけ」と称される。

解 にこやかに笑みを湛えながら指さす「笑いぼとけ」。あれは屁ひり虫の屁を指さしてのことだ、の意。勝峯『評釈』は「蚤とぶや笑ひ仏の御口へ」(文化九)、「稻妻にげら〜笑ひ仏哉」(文化一三)、「あれ花が〜と笑ひ仏哉」(文政三)などをあげるが、この「笑ひ仏」は、笑いざかりの幼児。同趣としてあげるなら、「ねはん像銭見ておはす顔も有(七番日記、文化12・1)」、「寝ておはしても仏ぞよ花が降る」(八番日記、文政2・1)「小うるさい花が咲迎寝釈迦かな」(前出)などが妥当である。

▼ 勝峯『評釈』に、「(略)普建の指をあげる方向を見ると、一疋の屁ひりむしが嗅いやつを落したところである。誰がやつたんだと怪しみ、その屁の正体が知れたので、手を拍つて囃さんばかりにあゝして笑つてゐるのである。笑ひ仏を詠むため、警拔にも屁ひりむしを案じて、そこに滑稽を求めたので、必

ずしも経堂に屁ひりむしが存在したと見ずともよい。一茶の空想を弄した作と解される」。川島『新解』に、「(略)二子のうち指さすかっこうをしている方が普建である。それを、事もあろうに虫の屁とは飄逸である。花と銭などのような皮肉や嫌味がなく、明るく快い笑いがたたえられている」。

得手もの、片足立や小田の雁 〵 (一茶)

㊦ 八番日記(文政2・8)。

▽ 梅塵本・八番日記(文政2)、中七「片足立よ」。

解 いかにも得意げに、小田の雁は片足立ちをしていることだ、の意。「片足立して見せる世杭の雁」(八番日記、文政2・9)が初案。

▼ 勝峯『評釈』に、「水を落した田へ、雁が下りて凝然として佇立してゐる」。川島『新解』に、「鶴や鷺の片足立は絵にもよく描かれるが、雁は一茶の観察である。片足立でジツとしている田の雁の均衡を保った姿勢。但し、鶴や鷺よりも幾分あぶなかく、スマートでないすがたが、『得手もの』すなわち得

意になって見せびらかしている、という感じにあらわされている」。

山寺や椽の上なる鹿の声 〃 (一茶)

㊤ 八番日記(文政2・9)。

▽ 八番日記、中七以下「縁の上つるし(な)「か」の声」。

梅塵本八番日記(文政2)、「縁の上なるしかの声」。  
解 山寺のぬれ椽にとび乗った鹿だが、牝を呼ぶのか  
一声あげた、の意。実景ではなからう。

▼ 勝峯『評釈』に、「怯懦な性格の鹿は警戒心が強くて、容易に人の棲むところへは姿を見せない。その鹿ですら山寺には恐れも怖びえもせずによつて来て、ぬれ椽の上にひよんと跳ね上つて、こゝにゐるぞと知らせるやうに啼く。牝を慕つて呼んで見たのであらう」。川島『新解』に、「これは無住寺であらうか。もっとも、その時期になると、人なじまない猫なども人を恐れずなるので、この鹿も牝を追って迷いこんで来たのかも知れぬが、一向に感動のない句である」。

下手笛によつくきけとやしか(の)声 〃 (一茶)

㊤ おらが春初出。

▽ 八番日記(文政2・9)、座五「鹿のなく」。七番

日記(文化15・9)、「鹿笛」と前書して、「山小屋や笛としりつゝ鹿の声」。

解 鹿寄せの笛の音の向うから、「よつくきけ」と言わんばかりに、鹿が高らかに一声あげてみせた、の意。

▼ 勝峯『評釈』に、「啼いても姿を見せない鹿である。そんな笛には瞞されぬぞもつと此地声を覚えて器用につくるがよい。と、鹿の方からからかつてゝでもゐるやうな高声である」。川島『新解』に、「鹿笛を吹いても一向に寄って来ず、あらぬ方向に真物の鹿が鳴いている、それはちょうど、『そんな下手笛にだまされるものかイ、ソレよく聞けよ、鹿の音はこういうものだ』と言っているようだ、というのである。『きけとや』は聞けとのか、の意である。『よつくきけ』は皮肉満点であるが、しかも、

この中七のために、哀切極まる振りしぼるような鹿の音が聞えてくる」。

茸狩のから手でもどる騒かな 〵 (一茶)

㊸ 八番日記(文政2・9)。

注 「茸狩」、キノコ取り。

解 遊山の「きのこ狩り」。何人か集って、気負いこんで出かけたのだったが、あいにくこの日の収穫はゼロ。楽しさだけを持ち帰ったのであろう。

▼ 勝峯『評釈』に、「一日かゝつて、山をさがし廻つて、此の体たらくでは面目なさに萎れきつて戻らずである。それが何んとあの騒ぎつたら、見られた図ではない。(略) 此のてあいは『茸をば付たりにしてさはぎ行』の出掛から、騒いで行つたが、果してみんな手振らで、往きにもまして騒々しい下山振りである」。川島『新解』に、「楽しい期待をかけて出かけて行つた茸狩が全くの不作で、人々が空手でもどってくる照れくささに、がやがやと騒ぎながら山を下ってくるさまである。これは黙々とせしめ

ていく山人のそれではなくて、行樂的な茸狩気分である。木の間がぐれに赤いものをひらつかせる女も交っている都人士の一行を思わせる」。

さと女世五日 墓

秋風やむしりたがりし赤い花 〵 (一茶)

㊸ おらが春初出。

注 八番日記(文政2・7)に、「(二十) 四晴 墓詣」とある。二十四日は、さと女(六月二十一日天折)の三十五日前日に当る。浄土真宗門徒は初七日、三

十五日に法要を営むが、幼児のことで、それらの営みはなかった。なお、文政版一茶発句集には、中七「むしり残りの」とある。

解 愛媛さとの三十五日前日。墓前に合掌して、顔をあげると、目の前に赤い花。生前あの子が好んで手をのばした花だ、の意。眼前の赤い花が、さらに天折した愛媛への思いを深めさせたのである。

▼ 川島『新釈』に、「一茶は子供を愛するためにいかなる讃辞も惜んで居ない。老後の情熱を一途に子

供の上に注ぎ込んで居るやうに思はれる、(略)折板さら／＼と秋風の吹く頃で、墓のあたりには真紅な蔓珠沙華が何か咲いて居る。死んだ子がよく目をつけてむしりたがった花で、その度毒草の故を以つて小言を言つたことなどを想起したと想像して見ると、一層堪らない作者の啜泣を聞くやうな気がする」。黒沢『研究』に、「可憐な句です。幼児と赤い花——の印象だけでもその切情を知ることが出来ます」。勝峯『名句評釈』に、「見る物聞く物が皆悲しい思ひ出の種である。『秋風』は只季節を示すだけの為に置かれたのではない。赤い花が、その秋風に吹かれ揺られてゐるのが、何か無しはかなく死んだ我が子の運命、我が子の姿の様に思はれもする。『赤い花』として特定の名称にしなかつたのもよい。特定の花にすると具体的になつて印象がはつきりするかはりに余りに限定になり過ぎて、その花の方へ感情の移入が行きすぎる。子供には萩も、桔梗も、撫子花もない。只花が在るだけだ」。暉峻『名句の鑑賞』に、「さらでだに物悲しい秋の風吹くこの頃、物皆

思ひ出の種とならざるものはない。その中で特に、生前さと女がむしりたがった赤い花が、さと女のはかない運命を象徴するものの如く、秋の風にゆれ動いてゐる。赤い花とは恐らく、秋の野に咲く深紅の蔓珠沙華なのでありませう。けれども幼児の欲望をそそののは、只にその赤い色をもつてなのです。一茶が花の名を言はず、漠然と印象的に『赤い花』と言つた用意の周到さを味ふべきです。勝峯『評釈』に、「今は草葉のかけに埋まつていくらくこんな赤い花があつても、あんなに挫つては喜んだ顔が見られない。せめて、もう少し、秋までいのちを延ばしてやりたかつた。此の赤いの、白いの、いろ／＼な花を思ひ残りなく、むしらせるためにも」。川島『新解』に、「今、墓に来て見れば、その子のよるこびそうな赤い花、蔓珠沙華か仙翁花のような赤い花がつんつんと咲き出している。ああ生きていたら……この句には悲しみも嘆きも言っていないが、それだけに人の胸を打つ真実がある」。加藤『秀句』に、「これはよくこんな風に解されているようだ。墓前

に手向けとして赤い花を挿してやった。これは亡き子の生前しきりにむしりたがったが、とめてむしらせなかったものだ。今その花に秋風がそよいでいるというのである。これだと、人情に訴えることなかなか哀切なものがある。しかし、そこに畏がある。

これは『むしりたがりし』という生のままの人情へ溺没することである。やはり、これが把握に際して燃焼し、きらめく時間を経てこないと救われないと思う」。丸山『一茶』に、「秋風の中を赤い花が揺れている。死んだ子がよく目をつけて、むしりたがった花だ。その赤さが目に痛く、一茶の嗚咽を誘うのである」。